

學友會々報

九州學友會

宗祖御隠棲の當初より六百五十年妙法の聲絶ゆる時なく、吹く風流るゝ水の音までも妙法の五字を唱ふる巖山が峯、祖山の學園に籍を置く二百有餘の健兒、遠く恩師慈父の膝下を離れ北は樺太、北海道、南は朝鮮九州と、負笈せる者も大半に及ぶ。茲に吾が九州學友會は異体同心の聖訓に基き會員の親睦と相互扶助の精神の下に生れ出たり。

吾が學友會は大正六年四月舊學友會の會則を改正し創立せられたり。爾後は會員努力により増々隆盛となり、大正九年には會則を改正せしが、更に時勢の變遷と共にその趨勢に測らんとて復昭和三年十月會則の改正を行へり。實に創立已來十有餘年益々隆昌を見るに至れり。

左に本會の會則の重なるものを舉ぐれば

- 第二條 九州男子ノ意氣ヲ發輝シ協同一致事ニ當ルヲ目的トス
- 第五條 會務發展並ニ布教傳道ノ法器ヲ育成スル目的ヲ以テ左ノ三部ヲ置ク

- 一、財務部
 - 一、文學部
 - 一、講演部
- 各部細則ハ別ニ之ヲ定ム

第六條 會員ニシテ不正行爲アル時ハ相互間ニ於テ誠告シ体面

ヲ汚ス時ハ除名處分ニ附ス

本則第五條ニ依リ各部細則ヲ定ム

一、財務部

第二條 乃至第二條ニシテ第二條ヲ又五項ニ分チ會計支出收入ヲ整理監督セリ。

二、文學部

第一條 本部ハ福岡市東公園發行妙道誌上へ『身延便り』ヲ同誌編輯部宛毎月二十七日迄原稿ヲ送付スベキ事

第二條 本部ハ幹事五名ヲ置キ時機ニ臨ミ名士ノ講演ヲ速記シ投稿スル事

妙道通信員

二名

名士講演速記員

三名

三、講演部

第一條 本部ハ幹事三名ヲ置ク

毎月二回説教、講演會ヲ交互ニ開催シ大ニ鍊磨ヲ行フモノトス、

第二條 本部ハ毎年適宜ト認ムル時ハ夏期布教ヲ行フ事、已上本會の會の重なる部分である。

(福山生)

北陸學友會

本校中、笹峯、關西、九州等、幾多の會在り。夫れ等の會は其の範圍と人員の多きとに於て遙に我が會を凌ぐ。然と雖も我が北陸學友會の有する幾多の特色は他會のひとしく敬慕すべきものたるを信ず。北陸學友會!! 其れは會員相互の扶助信睦であり同郷人の合理的融和の集合機關であり、同時に北陸地方即ち新潟、富山、石川、福井、滋賀の五縣下の寺院全部を推載し、是れと連絡を取りて、將來宗教家としての一戰具たる、辯論の實地練磨をなし、是れ等信徒の來詣の便宜を計る等。以て吾が學友會の使命、面目とせり。然り然して吾が學友會は大正九年の創立にして、日未だ淺し、然れど已來十數名の卒業生を、相繼いで出す、是れ本學友會の歴史なり。蓋し其等諸先輩良く吾人の任務を全うしたりと言つべし。今や會員十五名中、責任者として記録、布教、會計の三部を設け、先輩諸師の意思を繼ぐ。愚昧淺薄も顧慮せず。吾等責任者は此の双肩に負ふ。本會の前途に、發展と幸福との彌益々盛んなるを祈るのみ。 完

『岩田記』

關西學友會報

『異体同心なれば萬事を成じ、同体異心なれば諸事契ふ事なし。云々』常に拜讀する聖祖の御遺文、而もそれが我々の身心に語り盡せむ教訓を培はしめ自づと胸禁をして正しくせしめる

事は、耆婆が妙藥に接せし人と同じく、不知の間に殆んど自然に起る瞬間の動作であらう。

尊いみ佛の永久にいます國大竺の靈鷲山を初め、震旦に於ける天台山、さては日域の比叡山、の如き名山!! 是等のみ山に尙勝れても劣るまじと本化の御稱讃遊ばされた、我が身延山。吹く風流るゝ水の音迄もの悉くが、劫初甚深の妙法を唱へざると言事なき聖素に、吾こそ如意寶珠を授り本佛の法悦に滴らんと聚ひ來る者本化の正嫡遊いて茲に六百數十年已降幾人?。而も是等慕聖學徒の爲に建設された母校祖山學院は、過去三百數十年に至る可成り古き歴史を有する學院である。從東、從西、從南、從北、負笈の徒は、各自祖訓の行學二道を勵み八星霜を聞いたる後、弘法廣宣の一助として郷關に勇猛精進する魄を鑑み、近隣合同の學友會なるものを組織して相互扶助の觀念を培養する事に専念である。就中我等が親しむ學友會なるものは京洛を中心とする關西で、今試に其關西學友會範圍を示せば近畿、中國、四國及び中部の一部に迄侵入した所謂大學友會である。創立已來日尙淺く僅か七ヶ年に過ぎないが、然し熱心情との結合である代々の幹事及び會員の協力は今日漸く會をして新運の曙光を見るに至つた事を、會員の一人として喜ぶものである。

我等が會の内容は第十條よりなる會員規約並に細則第四項とを合せ成立せるもので、其二端を述べば規約第五條に依て關西出身有徳の師を顧問に推戴、及び第四條會長一名、幹事三名を

置き諸班の事業を遂行せしむ、且又毎學期一回已上の會合を開く等に依り成立せるものである。(但し規約及び細則は多少變更を免れず)

大正十二年六月三日に會組織の會合、當時の發起者は中等部の中堅、重松學壽君、山口龍明君、吉川啓善君等、我等が先輩は幾多の涙ぐましき難關を斥け奮闘の結果茲に大正十二年十月廿九日顧問に現武井房住職、當時七面山別頭小松海淨師を仰ぎ、同師の熱心な御同情よりなる御援助を待つて、會長に岡觀修君、副會長に野崎學穩君、幹事に山口龍明君を選び會場武井房にして茲に漸く其第一聲を擧げた、當時會員は約廿名足らずであつたが現今是れが殆ど倍して卅五名に滿々とする會員を有し、各學友會中に名實共遜色無きに至つた前提をなしたものである。

大正十五年十月廿九日には關西學友會事業として東谷に淵獄寮を創設し學生の寄宿に充てた、此の事業は昭和二年十月迄繼續したが二、三の事情の爲武井房小松顧問へ返済した、然し當時の淵獄寮は現在に至るも尙數名の學生を收容せる事は、會の興つて力ありと云ふても過言で無からう。昭和二年五月卅日には關西學友會夏季布教の件を決議し直ちに同年度より辯士三名を派遣し實行した。只惜むらくは會基金僅少の爲充分なる應援の出來ざりし事を。又大阪明淨高等女學校の毎夏參詣旅行には會の許す限り歡迎している。

自分は希望として愛する學友會が最も眞劍味のある事業とし

て、そして又期待する大發展其等總てのキヤステング、ポर्टを握る會員諸子よ、私は此の誠意と熱情とに燃ゆる諸子を心から歡迎し一層の活躍を望むものである。晩近學友會卒業先輩者と提携薄き爲地方との聯絡が次第に疎隔となる事を痛事とするが、是は一般に見做れる弊害であるから早晩改良される事を信じて疑はない。

(吉田生)

東北學友會

東北は由來東漸佛教をして本化西漸佛教たらしめ閭浮統一の大理想を宣し玉ふ蓮祖の錫跡こそなけれ、永仁三年六老僧の俊傑蓮華阿耨梨日持上人海外布教の途上草莽を開拓し本因の下種遊ばされた地、身延山寄進の大檀越として勤王家としての波木井公の子孫永住の地である。斯の如き歴史的背景を有する東北は爾來益々妙教流布の機運に向ひ今や求道者研鑽の學徒漸く靈地身延の學院へ遙々負笈する者年々その數を加へ茲に郷友相會して談合する事屢であつた。會の搖籃時代は暫くおき來延する學生増加し會合の數も繁くなり自然に團體組織の必要を感じこゝに學院教授猪口海淨師、宗祖報恩の爲鏡圓坊に來住せる南部男爵を顧問として大正十三年春學生加藤鍾明君佐藤海澄君等の尽力の下に東北學友會は生れたのである。當時會員は十數名であつた。間もなく江利山義顯師が學院教授となられたので會の指導を懇願した。これより會の隆盛見るべきものがあつた。

會則等の設はないが異体同心の祖訓を奉戴して信仰行學を勵み他日東北の天地に妙法廣布の花を咲かさんものと開會の度毎研究發表辯舌練磨、或は名士を招待して學術講座を開催し佛事奉仕作業等隨宜之を實行してゐる。これ皆佛祖報恩の一分と心得てゐるので本會員は創立式以來如何なる催しの場合も一人も欠席者が無い。現在會員の數は十三名卒業せる者七名轉校者三名である。

因みに本會顧問江利山先生は輓近身延文庫の大整理を遂行せられ今や身延圖書館創立の曙光を見るに至つた。猶傍ら本會の爲に盡力せらるゝ事筆舌には盡し難い。猪口先生はその后群馬縣妙光寺にあつて中等教育に従事して居られる。

南部男爵は岩手縣に日蓮宗教會所を設立して佛道布教の傍ら家寶を護持して居らるゝが、身延に於ては従前通り本會顧問である。

(武田生)

鷺峰學友會

吾が鷺峰學友會は初めは甲陽學友會と稱し單に甲陽山梨縣に法籍又は俗籍を有する學徒のみによりて創設維持せられしものにして、漸次發展を來せる結果、大正十四年四月遂に東京、山梨、静岡、神奈川、長野、千葉、群馬、茨城、埼玉、栃木、の一府九縣の學徒より成る鷺峰學友會を生むに至れり。蓋しこれ聖訓

『日蓮が弟子禧那は此の山を元として參る可し』に範り、またたへぬみ法の鷺の山風を仰慕するより成れるものなり。

されば吾等のモットーとする所は『行學の二道はげみ候べし、行學絶えなば佛法はあるべからず』の聖訓に在り。

吾等の盟約とする所は『異体同心の聖訓に基き、會員相互の親睦を計り、以て將來布教傳導に貢獻するを以て目的とす』の會則に在り。

我等の擁護する會旗の、金モールにふちどられた緋地に燃ゆるが如き橘紋の縁は聖祖の赤誠と吾等の希望をこそ表徴するに足れり。

斯る意義あり、長き歴史を有する吾が學友會は創立以來幾多の卒業先輩を送りて、何れも宗門に、社會に、目醒ましき貢獻と指導をし或は新開地に雄飛し、或一人は我那最北端樺太の開教地に單身弘法に努めつゝあるは蓋し會の誇とする所なり。

本會は賛助會員、特別會員、正會員より成り、吾が祖山學院教頭高田惠忍師、教務主任塩田義遜師を首め清水玄正、丸山頌孝、松木本興、望月舜勝の諸教授、本山役課としては録事望月本良師、渡邊智正師を首め望月本啓、小林貞宣の諸師何れも之が賛助員として後援を忝うし、殊に松木本興、丸山頌孝、望月本啓の諸師顧問として直接御指導を賜はりて現在四十餘名の正會員は將に鷺峰を奠立たんとしつゝあり。其の試練として文學部、辯論部を設けて文書練磨に、説演練磨に、若き意氣は彌か

昇らざるを得ざる状態に在り。毎月廿五日夜身延大善坊功德會の請に應じて往て法筵を張り、世の恵まれざる善男女に心よりの慰安を與へ共に聖祖の

有智無智をきはらず一同に他事を捨て、南無妙法蓮華經と唱ふべし

の信念を培ひつゝあるは他に追従を許さざる意氣に非ずや。

鷲峰、鷲ヶ峯こそ、げに文字通り宗門の否、一閻浮提統一の聖地に非ずや。

此鷲峰に培ひし不撓の信力を以て活社會の陳頭に立つ若人こそ又これ第二の日蓮に非ずやと。

(石井生)

本誌發行費中ニ御援助下サレタル左記ノ方々ニ謝意ヲ表ス

一金拾圓也	學院長 堀下
一金五圓也	冷泉執事長 殿
一金五圓也	中村執事次長 殿
一金拾五圓也	教師 課 殿
一金拾圓也	本山會計課 殿
一金參圓也	藤田惠曉 殿